

「満州からの引揚げ体験」 三浦嘉子氏

三浦さんは昭和 18 年、結婚を機に当時満州と呼ばれていた中国東北部の佳木斯に渡りました。昭和 20 年 8 月 9 日、ソ連の満州侵攻により、乳飲み子を抱えての逃避行が始まりました。昭和 22 年 10 月、長崎に引揚げるまでの過酷な体験をお話いただきました。

「明日の朝 5 時に一週間ほどの疎開をします。」これが逃避行の始まりでした。郵便局や銀行は閉鎖していました。すべての家財道具を売りはらい、お金は背負紐の中に縫い込みました。翌 8 月 10 日の朝、無蓋車に乗せられて綏化に向かいました。「匪賊襲来！」の聲に、その都度汽車は止まり、貨車の下にもぐり込むことを繰り返す一週間でした。綏化にたどりつき、目的地に延々と歩いていくうち、初老の女性が頭がおかしくなったのか、突然、歌をうたい出しました。その歌は今でも耳に残っています。連れて行かれた先の飛行機の格納庫で、およそ 2 か月半、500 人ほどの難民生活が始まりました。食事は、朝夕のコーリャンのおにぎり 1 個と塩汁。栄養失調と不衛生な環境に病人が増え、亡くなる人もいました。仲の良かった女性の子どもが亡くなりました。子どものためにもってきた 1 枚きりの晴れ着をきせて裏山に埋めましたが、翌朝には掘り出され、何も残っていませんでした。10 月末、向かった新京(現在の長春)では、中国人の罵声と投石が待っていました。ここではすべて自給の生活でした。空き家に入り、放置された銀行の紙で花札を作り売りました。その他たばこを売り、新聞を売り、回転焼き、看板描きもしました。飲食店に勤めたこともありました。やがて、「内地送還、夢虚し」のビラがまかれました。本当に日本に帰ることができないのか、中国で生きていくのだろうかという迷いから、裕福な中国人に子どもを売ってしまう人もいたほど、精神的に不安定な生活が続きました。新京での生活が 2 年ほどして、帰国命令があり、葫蘆(コロ)島に向かいました。車中ではみな日本の食べ物の話ばかりしていました。その頃、私の体重は 35 kg ほどになり、骨と皮だけの体になっていました。長崎に向かう貨物船の中で、子どもを抱えた私に「あんたえらかったねえ。子どもを死なせずにつれてこられたねえ。」とある女性の言葉に流れる涙をとめることはできませんでした。

三浦さんのご主人は、ほどなく復員されましたが、病床の内に亡くなられました。

結婚生活わずか 10 か月のことでした。その後、故郷の滋賀県彦根市で教員をしながら、女手一つで子どもを育てられたそうです。ご苦勞の連続であった三浦さんは最後に「わずか 3 年ほどの体験ですが、戦争だけはどんなことがあってもしてはいけない。」と 62 年前の過酷な体験に平和を希求する思いを込めて、力強く結ばれました。

(この交流会の内容は、「資料館だより」から転載しました。)